

常総水害からの復興をめざして

JUNTOSは
ポルトガル語で
“いっしょに”



たすけあいセンター JUNTOS! 通信

2020年6月1日発行 第27号

日本語版



えんがわハウス 改修工事を終え本格稼働へ



母屋

住宅棟

旧診療所



多世代・多文化交流の場



保育の場



コミュニティカフェ



2月16日に開催したえんがわプロジェクト報告会

2015年9月の鬼怒川水害で浸水被害に遭い、その後空き家になっていた常総市水海道にある旧片野医院と住宅との出会いは、2016年の秋でした。

周辺ではレストランや家が壊され、人口流出が進んでいました。ここを拠点に地域を再生しようと「えんがわハウスプロジェクト」は始まりました。

多くの方にボランティアで片づけていただき、寄付もいただきました。3年かけて、ついにかたちになりました。2018年春に多文化保育が始まり、2019年10月にカフェが動き出し、2020年2月に母屋の耐震工事が完了しました。最後に改修した母屋は、子どもから高齢者まで集える場となります。

ご支援いただいた皆様、ありがとうございました。

母屋1階で行う「多世代交流保育」とは

えんがわハウス母屋は、2階でこれまで同様、外国ルーツの子どもを主な対象とした学童保育を行うほか、今後は図書室も併設し、不登校の児童生徒や16歳以上で来日して中学校に入れない外国の子の高校受検を支援するフリースクールとして運営します。

1階は、保育と高齢者や地域の方の寄合所を兼ねた場とします。東京の小金井市に先進的な多世代交流施設があります。2月16日に母屋で開催したプロジェクト報告会にもゲストに来ていただいたのが「NPO 法人 地域の寄り合い所また明日」の森田ご夫妻です。そこがどのような活動をしているのか見ようと、コモンズ・スタッフがまた明日を訪問してきました。多世代共生が実践されている様子と感想を、お届けします。

多世代交流保育とは

コモンズが保育園を運営する上で大切にしているキーワードが、多文化と多世代が交流する保育です。子どもから年配の方まで、様々な世代が関わり、交わる保育を目指しています。園児は、大人から伝統的な遊びや行事を教わったり、絵本を読んでもらいながら自分の世界を広げていきます。また、おじいちゃん、おばあちゃんはこれまでの経験を活かし、次世代を担う子どもたちと関わる中で生きがいを感じたりするかもしれません。いろんな年代の人が交わり、お互い学び合いながら成長していく、生きる素晴らしさを感じる、そんな施設が多世代・多文化交流施設です。

「また明日」は、住宅街のアパート1階の5室の壁を取った長い間取りになっています。施設の中に入ると、まるで自宅にいるかのように和やかな表情のおばあちゃんたち。そして、その中にまだ小さな子ども数人の姿があり、温かく迎えてくれました。他の子どもやおばあちゃんたちは、天気が良かったので近くの川へ桜を見に散歩に出かけているとのことでした。待っている間、施設の代表である森田さんご夫妻にお話を伺いました。この施設はデイサービス、保育施設、そしてどなたでも気軽に立ち寄れる「寄り合い所」として、世代を超えた人が集う場所だと言います。人間の本質である生きることを考えていったら、こういうかたちになったそうです。そんな中、みんなが帰ってきました。川で水遊びをしたためシャワーを浴びる子。服が濡れて着替えをする子など、みんな遊びに満足し、とても生き生きとした顔だったのが印象的でした。かたや認知症のおばあちゃんは、自前のエプロンを付けて「私が面倒を見るのよ」と、子どもたちの着替えを手伝っている姿がありました。認知症の方が多いこの施設で、彼女らができることをやってもらい、静かに見守るスタッフの姿がありました。誰が保育士かヘルパーか見ただけではわかりません。お昼を過ぎ、おなかをすかせた子どもたちがご飯をむしゃむしゃとおいしそうに頬張っている側で、おばあちゃんたちが手伝いながら和やかな時間を過ごしていました。

毎日特に決まったプログラムはなく、生活そのものを急がず、丁寧に過ごしている姿に感銘を受けました。そこには、高齢者だから、子どもだからということに関係なく、そこにいる皆が生き生きと自然体な姿がありました。幅広い世代が自然なかたちで共に時間を過ごし、心を寄せ合う居場所づくりの様子と、その背景にある運営者の考え方や運営上の工夫など、これから地域の居場所をつくりたい私たちには、とても参考になりました。

(はじめのいっぽ保育園 主任保育士 安藤)



左が「また明日」の外観。上は「また明日」のウェブサイトで掲載されている日々の様子

また明日の森田ご夫妻は、奥さんは保育の仕事、旦那さんは介護の仕事をしてこられました。2月16日にご夫妻が母屋の報告会に来てくださった時のやり取りです。



Q. 部屋を高齢者デイと保育で区分するよう行政に言われませんでしたか？

A. 行政には時間をかけて想いを伝え、どうすれば制度をクリアするか共に考えました。

Q. 認知症の方と乳幼児が接することでリスクはないのですか？

A. 保育士もヘルパーも全体を見るようにしていますが、リスクの排除だけを考えるのではなく、どんな関わりが生まれるか見守ります。待つことが大切です。いろいろなことは起きますが、「また明日はそういうところですよ」と利用者の家族には説明し、納得して利用してもらっています。

はじめのいっぽ保育園 認可保育所として生まれ変わります！

2018年4月に開所した多文化保育施設「はじめのいっぽ保育園」。開所から2年が経つ2020年4月1日から、小規模保育施設として常総市の認可保育所となりました。今回の認可は、0～2歳児が対象です。3～5歳児は、これまでどおり認可外保育施設として運営してまいります。ここでは、認可に向けた取り組みの経緯と、保育園の今後の体制をご紹介します。

認可保育所になるまで

「はじめのいっぽ保育園」を開所して3年目を迎えます。コモンズが多文化保育施設開所に至った背景には、外国人世帯が抱える保育に関する課題がありました。コモンズが実施したアンケート調査(2017年実施)では、保育所での日本語でのコミュニケーションや書類作成の不安、母国語での翻訳・通訳ニーズが高いことが分かりました。このような外国籍世帯のニーズに応えるために、バイリンガル・スタッフを配置して開所されたのが本園です。当園では、お便りの翻訳、受け渡し時の通訳のほか、他保育所への入園手続きの補助、小学校の就学に向けた支援(園児への日本語学習、就学手続き)、医療受診など子育てに関する相談支援・病院への同行、災害時対応などを行っています。

一方で、認可外施設のために公立保育所に比べて保育料が高かったり、土曜日は開所していなかったりと、利用者の方には負担をかけていました。また、定員も少なかったため、空きが出るまで待機していただくこともありました。

そこで、利用者の方の負担の軽減と、より多くの地域の方に利用していただけるよう、2019年に認可保育所に向けて取り組みました。市へ提出する要望書には、地域の皆様からご署名いただき、多大なるご協力をいただきました。約300にも渡るご署名をいただいた結果、小規模保育施設(B型)として認可を受けるに至りました。

「JUNTOS！通信25号」にアンケート結果を掲載しております。(<https://www.juntos-joso.org/>)

バイリンガル・スタッフとは、日本語と外国語(ポルトガル語、英語、タガログ語)を話せて、保育に関する基礎的知識をもつ保育者です。本園のスタッフは、茨城県が実施する「子育て支援員研修」を受講しています。

小規模保育施設とは？～今後の体制について～

年齢区分	0～2歳児 (認可)	3～5歳児 (認可外)
活動場所	はじめのいっぽ保育園 (これまでと同じ場所です)	えんがわハウス 1階 (はじめのいっぽ保育園隣の建物です)
定員	9人(令和2年度)	5～10人程度
入園手続き	常総市役所こども課	はじめのいっぽ保育園
保育提供日	月～金 7:00～18:30 土 8:30～16:30	月～金 7:00～18:30 土 なし(希望がある場合は要相談)
保育料	保護者の所得により、市が決定	はじめのいっぽ保育園が決定 ※ただし、3歳以上児は無償化の対象です
連携保育	学校法人 きぬ学園	連携先は地域全体

皆様のご支援のおかげで、この度認可保育所となることができました。ありがとうございました。今後も地域のニーズに応えられるよう、尽力してまいります。保育園の園児はじめ、地域の皆様方との多世代交流を通して、課題に共に取り組み、地域の輪をさらに広げられるよう、努力してまいりますので、引き続きご声援・ご支援のほどよろしくお願いいたします。

～「はじめのいっぽ保育園」スタッフ～

園長：横田能洋
保育士：安藤加代子 奥本利香 直井かおり
神田あずさ
バイリンガルスタッフ
：マラバナン・ビビアン(フィリピン)
坂本パトリア(ブラジル)
ノダ・タカコ(ブラジル)
ソガベ・サブリーナ(ブラジル)
調理員：コンドウ・レイラ



はじめのいっぽ保育園の情報はこちら



外国ルーツの子の可能性が引き出され、誰もが地域の一員として暮らせるように

2009年のリーマンショック後、常総市では多くの日系ブラジル人が派遣切りで職を失う困難に直面し、公立小中学校では外国籍の子が急増しました。コモンズ代表の横田が常総在住だったことから、こうした方々の就労と就学の支援事業がスタートしました。それから10年が過ぎ、支援事業の対象や内容も下記のように広がってきました。

	事業概要	対象	連携先
子どもへの支援	認可保育(定員9名) 小規模保育B型として実施 外国人親子に多言語で支援	0~2歳の幼児 と保護者	常総市などの子ども課
	認可外保育(定員10名) 就学支援も兼ね多世代交流 型で実施 母語教育の推進も実施	3~6歳児の幼 児と保護者	地域住民
	学童保育 宿題、日本語、学力の向上、 社会体験の場づくり	小学生	小学校
	アフタースクール 高校受検に向けた学習支援	中学生	中学校 ボランティア
	プレスクール	就学前の子 来日直後の子	学校、教育委員会、 学習支援組織
	フリースクール	不登校の子、 16歳以上で 来日した子	
外国籍住民向け支援	グローバルサポート 外国児童生徒の受け入れ体 制づくり、 文書翻訳、通訳や日本語指 導者派遣 通訳付き高校進学ガイダンス 生涯学習、家庭教育分野へ のアドバイザー派遣、文書の 翻訳、通訳派遣	公立小中高	県、各自治体の教育委 員会、学校、大学、翻訳 や通訳スタッフ
	多文化ソーシャルワークに関 する実態調査と研修プログラ ムの開発と実施、福祉関係 文書の翻訳や通訳の派遣 外国籍住民の福祉サービス 利用に関する相談対応		県内福祉機関、市町村、児相、保健所、 保健センター、地域包括支援センター、 保育所、養護施設、高齢者施設など
	各地で通訳をしている外国 人当事者が制度やルールを 学ぶ研修実施と組織化 ピアサポーターによる外国人 世帯への講座(税、福祉制度、 社会保険、労働契約、保険、 防災など)	外国人ピアサ ポーター	外国人雇用企業、入管、 自治体等



日本の子もブラジルの子も共に育つ



サマースクールでの学童の子たち



日本語ゼロのパキスタンの兄弟
姉妹への送迎付きプレスクール



貧困、家庭内トラブル、借金、心や体の障がいなど、様々な悩みに対する相談先や制度をまとめた冊子の多言語版を作成(日、英、ポル、スペ、タガ、中)

多文化ソーシャルワーク推進事業はWAM福祉医療機構のモデル助成事業として実施しています



学習支援業はベネッセこども基金の助成を受けたほか、県教育委員会からグローバルサポート事業を受託して実施しています。

学習支援に関する情報

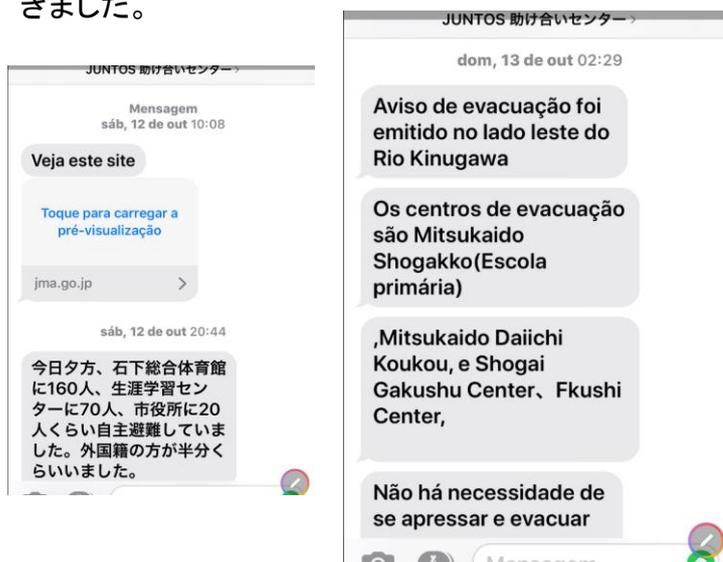


外国籍住民支援の情報

自主防災の推進、災害時に誰もが逃げ遅れなくて済むように

2015年の鬼怒川洪水で常総事務所が被災してから、地域の復興と合わせて取り組んできたのが、次の災害に備える自主防災です。前回の水害で、多くの人に避難に関する情報が届かず、避難所の受け入れ態勢も不十分だったことから、多くの住民が逃げ遅れました。その反省から、コモンズ事務所がある常総市の森下町と橋本町の自治会と地域の学校と連携して、誰もが避難できるバリアフリーな避難所の開設訓練を重ねてきました。防災無線を補完するため、登録型のショート・メールも導入し、外国籍住民対象に翻訳できるようにしています。

10月の台風19号の際は、台風への備えを多言語で発信し、ピアサポーターと連携してSNSで避難情報を流した結果、日本人よりも早く物を持って避難所に避難する外国籍の方が多くいました。その多文化防災の取り組みはNHKでも数回ドキュメントで放映されました。12月15日に水海道中学校で行われた訓練ではブラジルの方がブラジル料理で炊き出しをしました。少しですが、訓練に参加する外国籍住民も増えてきました。



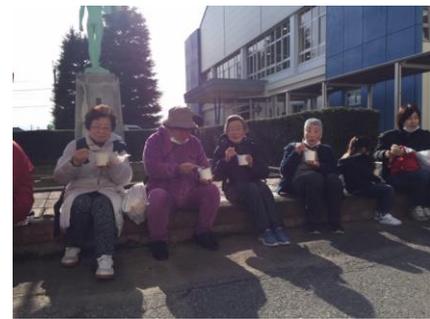
台風に備えましょう（強風だけでなく停電や断水、豪雨による浸水もあります）

1. 家の外のを固定、または縛って風邪で飛ばないようにする。または家の中に入れておく
自転車、バーベキューコンロ、タイヤのカバー、鉢植え、など
2. 強風で窓が割れることがあるので、雨戸があれば閉める
ガラスが割れるのを防ぐには、内側にフィルムかダンボールを貼る
3. 川の水があふれる浸水に備える
水が来そうな場合は、車を高い場所に移動する
物置や家の部屋の低いところにあるものを高いところに移す
土嚢袋を買ってきて水が家や倉庫に入らないようにする
ドアや窓の隙間から水が入らないようガムテープなどで塞ぐ
4. 停電に備える
電池式のライトを用意する（電池も買っておく）
（携帯のライトの上にペットボトルを置くと、部屋が明るくなる）
電池式などの携帯充電器やモバイルバッテリーを用意する
車で携帯の充電できるようにしておく
5. 断水に備える
飲み水はペットボトルの水を買っておく。飲み水以外は、お風呂に水をためておく
トイレの水が流れなくなる時は、ためた水をペットボトルに入れて流す
水が流れなくてもトイレが使えるシートと凝固剤を買っておく
6. 避難に備える
ラジオやwebなどで気象情報や避難情報や避難所情報を確認し、早めに避難する
水が溜まった道路を歩くときは、長靴と足元を確認するための棒（杖）を用意。
7. 電気や水がない中ででの生活に備える
カセットコンロを用意する
カセットコンロのお湯で作れる食品（麺類、ご飯、スープなど）を買っておく
8. 停電などで店が閉まるかもしれないので必要なものを早め買っておく
薬、食品、オムツ、ブルーシートなど
9. 困ったら juntos（横田）へ 090-8854-0831

ショート・メールでは、地域のお店が何時に閉まるか、どこの避難所がいつ開くか、ペットと避難できるのはどこかなど、市役所ともやり取りしながら細かい情報をタイムリーに流しました。事前に電話番号を登録した人に配信し、翻訳版も流しました。



中学校での避難所開設訓練ではベット、トイレ、持ち出しグッズを展示し、体験してもらいました。



台風に備えることを上記のようにまとめ、英語、ポルトガル語、スペイン語に翻訳して関係する外国人世帯に手渡したり、ウェブに掲載しました

訓練のチラシを翻訳し、配布しただけでは外国籍の方の参加がなかったので、どうしたら訓練に来てくれるか、企画段階からブラジルの方と相談したところ、食べものとなりました。どうせならとブラジル名物の「フェジョアード」の炊き出しを7時間もかけてつくりました。日赤奉仕団のごはんと一緒に食べると、本当に美味しい炊き出しに。数名でしたがブラジル人の参加も増えました。ブラジル料理は料理が得意なブラジルのお父さんにお任せ。担い手になってもらうのが一番だと感じました。

常総の被災と復興・自主防災の経験を伝え、支え合う取り組み

昨年の台風19号は茨城県を直撃。常総市は鬼怒川の水位が上がり、避難指示が出されるなど、再び水害の危機に遭遇しました。堤防が強化されたおかげで、今回は水害に遭わずに済みましたが、全国各地で甚大な浸水被害が発生しました。茨城県内でも、県北地域の久慈川や那珂川で堤防が決壊し、全半壊は2,500を超えました。常総水害を経験した者として何が出来るか考えました。コモンズは常総のえんがわハウス改修が大詰めで、カフェも開くタイミングでしたので、現地の片付けに行くことは難しいと考え、情報の面でできることを考えました。水害が起きた後に何をするかマニュアルを作成していたので、それを被災地の災害ボランティアセンターや避難所に届けながら、各地の状況を把握することから始めました。

水害に遭った世帯は、まず家の中の泥を取り除き、水に浸かった家具などを処分する作業に追われます。そこは災害ボランティアセンターが派遣するボランティアが対応できます。濡れた床下や壁の内側のカビで家が痛むのをどう防ぐか、家の改修費を抑えるため、支援制度をどう活用するか、といったことは被災した方もどうしたら良いか悩むことです。その情報を伝えるために、大子町や常陸大宮市で、被災地に出向いて説明会を行いました。区長さんから実施の申し出があった地区で、近所の住民の皆さんに、床下の泥だし、乾燥、消毒の手順や気をつけることを水害後の家の改修の経験が豊富な人が説明したのは好評でした。



被災した区長さん宅での説明会

次に、台風被災地支援をしようとしている団体に対して、茨城大学や県社協と連名で声をかけて、「災害支援いばらきネットワーク会議」を結成し、毎週情報共有会議を開催するようになりました。そこには、社協、大学、生協、フードバンク、弁護士や司法書士、青年会議所など多様なメンバーが集まりました。皆、被災地のニーズやできることを求めていますので、ネットワークでできる活動として、足湯サロンと炊き出しを企画しました。食料や物の支援も大切ですが、4年前の被災した経験から、被災した住民の方同士が今後のことを互いに情報交換できる機会や一休みできる時間、被災地外の人とも繋がる場が重要だと考えたからです。このサロンも、被災地区からの申し出に基づいて行うため多くの回数を行うことはできませんでしたが、今後も行っていけそうです。



大子町の集会所での足湯、炊き出し

今後の取り組み

10月に被災したため、12月には冬を迎え、家の改修ニーズは潜在的にあるものの、市町の災害ボランティアセンターも閉じられていきました。外からの支援が細くなり、さらに2月からは新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、現地に出向く活動も困難になる中で、台風被災地のことは忘れられてきています。けれど常総の例を見ても、住宅再建地域の復興には何年もかかります。

水害で忘れていけないのは、泥や災害ごみの片づけは最初の課題で、その次に人口流出と空き家の増大、コミュニティの弱体化と孤独という課題に直面するということです。そうした見えにくい課題に対する公的支援はほとんどなく、住民自らが取り組まなければ地域の復興は困難です。さらに昨年被災した川沿いの地区は、今後も水害に遭う可能性があるため、自主防災も重要です。これらの課題に各地で取り組みやすくするために、コモンズは常総で取り組んできた活動を息長く県北の被災地、さらには他県の水害被災地にも伝えていきます。

新型コロナウイルス感染予防で、2月から現地に伺えなくなる中、常総で4年前に被災した方に、水害から4年半が過ぎて家の再建がどうなったか、今の心境などを伺うアンケートや聞き取りを行いました。今回の台風被災者へのエールも多く寄せられました。そのような常総の人々の声、えんがわハウスのような空き家再生がもつ可能性、DIYで工夫すれば改修費を節約できることなど、冊子にまとめて被災地に届けていきます。また、実際に自宅をDIYで改修したいという方に電動工具を貸し出したり、DIY講習会も行っています。



台風被災者支援には日本財団、ジャパンプラットフォームの支援をいただいています



私たちのコロナ対応

- ・2月に母屋の改修が終わり、これから多世代交流拠点を開こうとしたら外出自粛となり、えんがわカフェも3月から閉じ、4月、5月は弁当宅配だけを行っています。6月の母屋とカフェ再開を目指して準備中です。
- ・保育認可直後に保護者に利用自粛を呼びかけることになりましたが、多くの家庭は仕事を休めず、感染に気をつけながら保育を継続してきました。新型コロナウイルス関連情報を多言語化し、保護者に伝えました。
- ・学習支援も学校が休校のため止まりましたが、在宅でも学習できる教材を導入したり、遠隔で学習支援を行う仕組みづくりをしています。うまくいけば、常総の教室に通えない子にも学びの機会をつくれます。
- ・カフェの隣の**外国籍住民の方向けの相談研修コーナー**で、生活に必要な情報(コロナ関連の支援策、税金、保険、防災など)を多言語で作成・発信して、情報格差が生まれないよう各言語の方と連携していきます。
- ・外出自粛要請のもとでも、自力で通院や買い物ができない人のための移動支援は必要なので、継続しています。カフェで作ったお弁当の宅配に続き、買い物代行も準備しています。運転協力者を増やしたいです。
- ・えんがわハウスの近くにあるアパートも改修が終わりました。3部屋の居室に共同のリビング、キッチンなどがあります。この物件を「**シングルマザー向けシェアハウス**」として運用します。幼児がいても保育のサポートができますし、 commons の連携先の強みを活かして、就労や生活面でも支援できるようにしていきます。

募集中

- ★イベント会場の利用者
休日に母屋やカフェの会場をお貸しします
10~30名、器材貸出可。懇親会応相談
- ★調理ができる方
えんがわカフェでは日替わりシェフ募集。
得意な料理、スイーツで出店しませんか
- ★買い物代行や外出支援スタッフ
(有償。都合のつく時だけでOKです)
- ★多文化保育や多世代交流型デイのスタッフ、ボランティア(調理、庭の手入れ、楽器演奏、読み聞かせ、本の整理など)
- ★遠隔学習支援スタッフ
外国ルーツの子にウェブを使って日本語や学習のサポートをするスタッフを募集
- ★使っていないタブレットがあればお譲りください
子どもが自宅で学ぶ際や、面会できない高齢施設での家族との対話に活用します

3,000万円を超える借入を返済し、えんがわハウスを軌道に乗せるため寄付を募集しています。

寄付受付口座
結城信用金庫 水海道支店
普通 0279141
ジュントス・常総復興まちづくり
株式会社 代表取締役 横田能洋



えんがわハウスに、遊びに来てね



災害復興・防災の情報



えんがわハウスの情報

たすけあいセンター「JUNTOS」

常総市水海道橋本町3571

えんがわハウス内
(常総線「北水海道駅」から徒歩10分)

電話：0297-44-4281

FAX：0297-44-4291

juntos@npocommons.org

時間：午前9:00～午後6:00

(日曜は定休日)

えんがわカフェ

(コロナの影響でカフェは閉じていますが、6月に再開の予定です)



北水海道駅

常総線

えんがわハウス (カフェ)